

動植物遺存体から食文化を考える

—堀河院跡の調査事例から—

<http://www.kyoto-arc.or.jp>

(公財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館



図1 堀河院跡出土の植物遺存体（一部の種は除く）

はじめに 私たち現代人の食事はバリエーションが豊かで、食材も国内外から取り寄せて調理され、食卓には様々な料理が並びます。しかし、このような食文化が形成されたのは幕末の開国以降、特に空と海を使った輸送技術が向上した戦後のことです。

それでは日本の食文化はどのような変遷を遂げてきたのでしょうか。平安時代後期から江戸時代の遺構の土を篩ふるいに掛け、抽出した種実類（以下、植物遺存体）と出土した生物の骨（以下、動物遺存体）を分析した平安京左京三条二坊十町・堀河院跡（以下、堀河院跡）の事例から考えてみたいと思います。

堀河院跡 御池通堀川の北東に所在する遺跡です。この場所は9世紀後半には、藤原基経が造営した邸

宅（堀河院）があり、10世紀中頃に円融天皇が里内裏（仮の御所）とし、11世紀後半から12世紀初頭には白河天皇と堀河天皇が里内裏とします。中世以降には貴族の久我氏の屋敷地であったと推定されており、桃山時代には豊臣家家臣の邸宅となります。その後江戸時代初期の元和9年（1623）に老中・土井利勝が拝領し、幕末まで土井家が所有する土地でした。では、2006年から2008年にかけて実施した発掘調査で出土した動植物遺存体のうち、食利用の可能性が高いものを中心に、時代順に見ていきましょう。

平安時代後期 白河天皇、堀河天皇が里内裏としていた時期の遺構からは、ヤマモモ、クルミ類、キイチゴ属、モモ、ウメ、スモモ、カラスザンショウ、ブドウ属、シソ属、ナ

ス、メロン類、アブラナ科（ダイコンやカブ、ワサビ等の野菜を含む科）が出土しており、メロン類は35%、ナスは17%でこの2種が半数を占めます（図2）。このうち、庭園に植栽されるモモやウメ等には観賞用と食用の性格があると考えます。同時期の遺構から出土した動物遺存体にはウシまたはウマの歯がありますが、牛馬を食べていたかについては分かりません。労働力として使役していたことは間違いのないでしょう。

中世 久我氏の邸宅と推定される時期の遺構からは、ヤマモモ、ムクノキ、クワ属、コウゾ属、キイチゴ、ウメ、ザクロ、カキノキ、アサ、アブラナ科、シソ属、ナス、ゴマ、メロン類、イネが確認できます。この時期の植物遺存体を分析した遺構